

ほしもりのまち

isinglass

はじまりのこと

むかーし、むかしのそのまたむかし。きみたちがうまれるよりもずっとむかし。

そらのむこうに、おほしさまとくらすひとたちがすむという、ちいさなまちがありました。ちいさなまちでは、だれもが、じぶんのおほしさまをもっていて、いつも、なかよく、おほしさまとくらしていました。

そらのむこうのちいさなまちに、ちいさなおとこのこがすんでいました。さいしょ、おとこのこには、じぶんのおほしさまがありませんでした。でも、ながいながいたびのすえ、じぶんのおほしさまにであうことができたのでした。

じぶんのおほしさまにであった おとこのこは、おほしさまと、ちいさなまちへかえります。しかし、ちいさなまちのどのまどでも、おほしさまはひかかっていませんでした。そう、おとこのことおほしさまとちいさなまちのおはなしには、じつはつづきがあったのです。

くろづくめのおとこのこと

おとこのこがたびだって、ちいさなまちには、くろづくめのおとこがあらわれました。
くろづくめのおとこは、いいました。
あなたがたのそのほしを、わたしにゆずってくださいませんか？と。

ちいさなまちのひとびとは、じぶんだけのおほしさま、ゆずるわけにはいかないと、だれもがみんな、ことわりました。
すると、くろづくめのおとこはいいました。
では、わたしのほしと、こうかんしましょう、と。

おとこのほしは、きらびやか。ひるだというのにぴかぴかと、いろとりどりにひかります。
ちいさなまちのひとびとは、じぶんだけのおほしさまと、おとこのほしをみくらべました。
そうして、すべてのまちのひとは、おとこのほしとおほしさまをこうかんしました。

くろづくめのおとこはわらっていいました。
てんのほしはいただいた。おまえたちは、ほしのほんとうをなにもみていない。
なにがほんとうにたいせつだったか、ほしをながめてかんがえるがいい、と。

まちのひとびとのこと

まちのひとびとは、びっくりして、こうかんしたほしをながめました。
おとこのほしは、ぴかぴかと、よるでもないのにひかります。
しかし、それはさいしょだけ。
だんだん またたきはちいさくなり、ついに、ひかりをうしなくなりました。

ほしのひかりをうしなって、はじめて、まちのひとびとはきがつかしました。
きがついたときには、もうおそく、くろづくめおとこはどこかへきえていました。
あとにのこったのは、ひかりをうしなった、にせもののほしだけでした。

ただ、みためのきらびやかさだけにきをとられ、おほしさまが、どんなにたいせつだったかわすれていたちいさなまちのひとびとは、ほしのひかりをうしなって、やっとほんとうのことをしたのです。

ちいさなまちのひとびとは、みんながなくてくらししました。
いくらなくても、おほしさまはかえってきません。
ぼろりぼろりとこぼれたなみだは、かわになって、うみへとながれ、ついにそらのうみは あふれてしまいました。

そらのうみから あふれたなみだは、そらのしたへとながれました。
そらのしたでは、ひとびとが、あふれたなみだにながされました。
あふれたなみだはそらのした、おおきなうみになりました。

ねがうこと

おほしさまをつれたおとこのこは、やっと、ちいさなまちにかえりました。
よるだというのに まどべには、おほしさまがひとつもありません。
いくつものとびらをたたいてよびかけて、おとこのこは、はなしをききました。

はなしをきいたおとこのこは、ぽたりとなみだをこぼしていました。
どうして、おほしさまをこうかんしてしまったの？それはおほしさまへのうらぎりだ。
もう、おほしさまはかえってこない。だれのもとにもおほしさまはやってこない。

まちのひとびとは、それをきいてかなしみました。
ふかくふかく、はんせいしました。
そして、おほしさまに、もういちど、あってあやまりたいとねがいました。

おとこのこのおほしさまも、ぽたりとしずくをこぼしました。
きらりきらりとひかるしずくは、かわをながれて、そらのうみへとたどりつきました。
すると、そらのうみのみなぞこで、なにかがきらきらかがやきました。

たびだちのこと

みんなでそのうみまでやってきて、かがやくものをたしかめました。
それは、そのうみのみなぞこに、ながいあいだにたまった、おほしさまのかけらでした。
うれしくてうれしくて、まちのひとびとは とびあがってよろこびました。

ちいさなまちのひとびとは、おほしさまのかけらをてにしてけっしんしました。
こんどは、まちのひとびとが、おほしさまをさがしにいくぼんだ、と。
まちのひとびと、それぞれが、おほしさまをさがすたびにでました。

いまは、かけらだけのおほしさまも、まどべできらきらかがやいています。
ほんとうのおほしさまがみつかるまで、まちのひとびとのかえりをまって、かがやきつづけます
。

おとこのこは、こんばんも、まどべにおほしさまをかかげます。
おほしさまも、うれしそうに、きらりきらりとかがやきます。
それからずっと、ずっとさきまで、おとこのことおほしさまは、なかよくくらしただけでした。

ほんとうのこと

ほんとうに、ほんとうにたいせつなものは、おほしさまではないかもしれない。
だけど、ほんとうにたいせつなものは、いつも、じぶんのそばにある。
そうして、じぶんでみつけなければ、それは、なくしてしまうまで、きがつかないもの。

それはむかしむかしのものがたりのつづき。

その昔、もしかしたら、これから未来。

空の向こうに、星と暮らす星守りが住むという、小さな町がありました。

星守りの町では、誰もが「自分の星」を連れていて、星と仲良く暮らしていました。

その空の向こうの星守りの町に、少年が独り暮らしていました。

少年には、「自分の星」がありませんでしたが、長い長い旅の末に、「自分の星」に出会うことができたのです。

「自分の星」に出会った少年は、星と共に町へ帰りましたが、旅立つ時に勇気をくれた誰かの星たちは、星守りの町のどの窓からも、光ってはいませんでした。

これは、そんな星守りの町の別の話。

少年が星守りの町を旅立ってから、町に黒づくめの男が現れました。

服装も全身が黒ならば、持ち物も黒。フードに隠れた素顔を見ることはかなわないけれど、黒い、よく光る瞳をギョロリとさせて言いました。

あなた方のその星を、私に譲ってくださいますか？と。

星守りの町の人々は、自分だけの「自分の星」を、簡単に譲るわけにはいかないと、誰もがみんな断りました。

すると黒づくめの男は、ニヤリと笑って、では、私の星と交換しましょう、と言いました。

男は担いだ荷物の中から、大きな袋を取り出すと、中から星を出して見せました。

男の星は煌びやかで、昼だというのにピカピカと、そして色とりどりにひかり、とても美しく見えました。

町の人々は、「自分の星」と男の星とを見比べ、最終的に、全ての町のひとびとが、男の星と「自分の星」とを交換しました。

「自分の星」を手に入れて、黒づくめの男は笑いました。

天の星はいただいた。お前たちは、星の何たるかを何も見ていない。何が本当に大切だったか、星を眺めて考えるがいい、と言いました。

町の人々は吃驚して、交換した星を眺めました。

男の星は、ピカピカと夜でもないのに光りました。しかし、それも最初だけで、だんだんと瞬きは小さくなり、ついに光を失いました。

星の光を失って、町の人々は、初めてだまされた事に気がつきました。

気がついた時にはもう遅く、黒づくめの男はどこかへ消え去っていて、後に残ったのは、光を失った偽物の星だけでした。

見た目の煌びやかさだけに気を取られ、「自分の星」がどんな存在のものだったか、どんなに大切だったか、忘れていた星守りの町の人々は、星の光を失って、やっと本当のことを知ったのです。

星守りの町の人々は、みんなが泣いて暮らしました。

いくら泣いても「自分の星」は帰ってきません。

こぼれた涙は川になり、海へと流れ、ついに空の海は溢れてしまいました。
空の海からあふれた涙は、空の下へと流れました。
空の下では、人々が、あふれた涙に流されました。そして、大きな海になりました。

「自分の星」と共に少年は星守りの町へ帰りました。
けれども、夜だというのに窓辺で光る星が一つもありません。
おかしく思い、いくつもの扉をたたいて呼びかけ、やっと話を聞きました。
話を聞いて少年は、どうして「自分の星」を交換してしまったの？それは星への裏切りで、もう、星は帰らない。誰の元にも星はやってこない、と涙をこぼして言いました。
町の人々は、それを聞いて悲しみました。深く反省し、そして、もう一度、「自分の星」に会ってあやまりたいと願いました。

少年の「自分の星」も、ぽたりとしずくをこぼしました。
こぼれたしずくは、きらりきらりと光って、川を流れ、空の海へとたどり着きました。
そのとき、空の海の水底で、何かがきらきら輝きました。
慌てて、水底を確認し、それは今までの長い長い年月の間にたまった星の欠片だと知りました。
ほんの欠片でも嬉しくて、町の人々は飛び上がって喜びました。
町の人々は、「自分の星」の欠片を手にして決心しました。
今度は、自分が「自分の星」を探しに行く番だと。少年が、「自分の星」を探しに行ったように、理由は違うけれど、もう一度会いたい気持ちは変わらないのだからと、町の人々それぞれが、「自分の星」を探す旅に出ました。

今は、欠片だけの「自分の星」も、窓辺できらきら輝いています。
本当の「自分の星」が見つかるまで、町の人々の帰りを待って輝き続けます。
町の人々が、「自分の星」を見つける導となるように。

少年も、窓辺に「自分の星」を掲げます。
「自分の星」も嬉しそうにきらりきらりと輝きます。
それからずっと、ずっと先まで、少年と星は仲良く暮らしたのでした。

本当に、本当に大切なものは、星ではないかもしれない。
けれど、本当に大切なものは、いつも自分の傍にある。
そして、自分で見つけなければ、それは、なくしてしまうまで、気がつかないもの。

拙い文章にお付き合いくださいまして、ありがとうございました。
もう少しだけお付き合いいただけますと幸いです。

前作同様に、絵本を想定して書かれた物語です。

前作「ほしおいびと」も合わせて読んでいただけると、なんとなくわかりやすいかと思われ
ます。

ほぼ同じ内容の話を、絵本としてひらがなで、読み物として漢字交じりで書きました。
どちらかでも、ワンフレーズでも、何か残るものになったならいいなあと思います。

「ほしおいびと」を書いた後、星追いの男の周りの物語が動き、対になるような星狩りの男が
生まれました。

その後も、けして交わることの無い軸で生きる彼らを、絵本という形で残した誰かの思いを、少
しでも残せたならよかったと思いますが、それは書かれることのない、また別の物語です。

お付き合いありがとうございました。